

Title	17世紀ピューリタニズムの労働観：重商主義者およびA.スミスとの比較において
Sub Title	The Puritan view of labour in the seventeenth century : comparing with the mercantilists and A. Smith
Author	今関, 恒夫
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1976
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.69, No.7 (1976. 10) ,p.539(39)- 554(54)
JaLC DOI	10.14991/001.19761001-0039
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19761001-0039

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

17世紀ピューリタニズムの労働観

—重商主義者および A. スミスとの比較において—

今 関 恒 夫

イギリス、16世紀後半にその端を発し、17世紀の市民革命をめぐりぬけ、やがて産業革命期に至る長期間にわたり、宗教的・倫理的・経済学的観点から論じ続けられたテーマがある。それは「勤勉」(industry, diligence)の勧め、あるいは「勤勉」と「怠惰」(idleness, slothfulness)との対比の問題と定式化できる⁽¹⁾。ここで宗教的と称するのは、ピューリタニズムの立論の方向を指す。倫理的と称するのは、例えばデフォー(Daniel Defoe 1660-1731)、フランクリン(Benjamin Franklin 1706-1790)、そしてアダム・スミス(Adam Smith 1723-1790)へと継承されていく、ピューリタンのもつ悲観的人間観を払拭した、つまりは楽観的雰囲気具备了た道徳的立論の方向を指す。経済学的と称するのは、重商主義者の労働観、そしてアダム・スミスの「生産的労働」論への結実を指す。

本稿の課題は、この動向の最初の段階であるピューリタニズムにおける「勤勉」の宗教倫理的要請が、どのような内包とどれほどの射程を備えていたのかを思想的に検討することにある。そこで先ず、重商主義の論者からスミスに至る「勤勉」論のあらましを辿り、ピューリタニズムのそれとの比較の下地を調べておかねばならない。

「勤勉」と「怠惰」との対比の問題は、スミスの場合、『道徳感情論』における「中流ならびに下層の身分」(the middle and inferior ranks of life, the middling and inferior stations of life)対「身分の高い高貴な人」(the man of rank and distinction)⁽²⁾、『国富論』における「生産的労働」(productive labour)対「不生産的労働」(unproductive labour)⁽³⁾、「厳格または峻厳な〔道徳〕体系」(the strict or austere system)対「自由または放縦な〔道徳〕体系」(the liberal or loose system)⁽⁴⁾という対比の形をとる。第1、第3の対比は道徳論的視角からの観察であり、第2の対比は経済学

注(1) 大河内一男氏は「一般に十八世紀中葉のイギリスにおける社会問題の核心は『怠惰』と『勤勉』との対比の問題」(同氏編『国富論研究I』筑摩書房、1972., p. 69)といわれる。その淵源は、さらに16世紀後半にまで溯る。

(2) A. Smith, *The Theory of Moral Sentiment* (*The Works of ADAM SMITH, LL. D.* ed. by Dugald Stewart, 1811-12, Vol. I, Allen Otto Zeller, 1963), pp. 91-2, 101. [水田洋訳『道徳感情論』pp. 80-81, 96]

(3) A. Smith, *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations.*, Cannan ed. Vol. I, p. 313 ff. [大内兵衛・松川七郎訳『諸国民の富』岩波文庫版(二) p. 337 ff.] 以下 W. N. と略称する。

(4) W. N. Vol. II, p. 279 f. [邦訳(四) p. 181f.]

的視角からのそれである。

道徳論的視角から「勤勉」の徳性を検討すれば、次のように整理できるであろう。

スミスにあっては「勤勉」であることは「中流ならびに下層の身分」あるいは「庶民」(common people)⁽⁵⁾、すなわち「独立生産者」⁽⁶⁾「市民的勤労大衆」の徳性の一部をなす。換言すれば「勤勉」は市民的境遇における利己心の現象形態なのである(これは「上流の人々」people of fashionの「軽薄」levity⁽⁷⁾や「怠惰」と対応する)。その場合、市民的勤労大衆においては一時の軽薄や怠惰も「命とりになる」⁽⁸⁾、という否定的契機だけが問題なのではない。かれらが「無名の境地」⁽⁹⁾を抜け出し、「財産への道」を歩むという自然的利己心を満すために、「慎慮」(prudence)や「勤勉」は不可欠の徳性だと積極的に主張されるのである。⁽¹⁰⁾

このように、「勤勉」は市民的勤労大衆が置かれた客観的状況と利己心とから発現するものとされるのであるが、その場合、かれらの教派(religious sects)との結合が、この徳性を強化すると考えられている点⁽¹¹⁾は、後述との関連で注目に値する(これもまた、スミスにあっては利己心にもとづく)。

ところで、「徳性への道」が「財産への道」と一致するということは、単に私的な宗教的倫理的達成が、私的利益の達成に一致するということだけを意味するのではない。それは、結果的に、「商業的社会」(commercial society)(=「市民社会」civil society)を媒介として、社会全体の物的福祉と結びつくと考えられているのである。⁽¹²⁾

ここに至って、経済学的視点に目を移さなければならない。スミスは労働を「生産的労働」と「不生産的労働」とに区別するのであるが、問題は、それを各々、「勤勉」と「怠惰」とに等置して

注(5) W. N. Vol. II, p. 279. [邦訳(四) p. 181]

(6) 小林昇『『国富論』における人間像について』(『社会思想』3-1, '73)「スミスは近代資本主義の表象をもち『国富論』ははじめて経済分析の場として資本制社会という認識を提供したけれども、この場の上で活躍する人間たちは独立の商品生産者という共通の性格を脱することができず、そのことが『国富論』の理論的達成にも限界をあたえたのであった」(p. 55)

(7) W. N. Vol. II, p. 279. [邦訳(四) p. 181]

(8) W. N. Vol. II, p. 279. [邦訳(四) p. 182]

(9) W. N. Vol. II, p. 280. [邦訳(四) p. 184]

(10) Smith, *The Theory of Moral Sentiment*, p. 101 [邦訳 pp. 96-7]

(11) W. N. Vol. II, pp. 279-280. [邦訳(四) pp. 182-4] ここでスミスは(1)非国教徒会衆を構成するのは庶民であり、その庶民は村落共同体の抑圧と保障の体系から抜け出した者であること、(2)かれらが大会にあって「無名の境地」(obscurity and darkness)を抜け出し、「ある程度の重要性」(a degree of consideration)を得るためには、「教派」(a small religious sect)に入る以外に方法はないこと(利己心!)、(3)その場合、「教派」の評判はかれ自身の名誉に関わるから、会員同志の牽制によって、「宗教上の小教派においては、庶民の道徳はほとんどつねにきわだって方正で秩序正しく、一般に国教会におけるよりもはるかにそうであった」ことを指摘している。一方で、スミスはピューリタニズムの道徳の「不快なまでの酷烈、非社交性」(ibid., Vol. II, p. 280, 邦訳(四) p. 184)、「大衆の迷信や熱狂の温床であるあの憂鬱で陰気な気分」(ibid., p. 281 邦訳(四) p. 186)に反感をいだき、科学や哲学、公衆娯楽の普及を奨励しているが、だからといって、ピューリタニズムと深い関わりを保ちながら「峻厳な道徳体系」が庶民のものとなってくることの社会的意味を割り引きしようとはしていない。

(12) W. N. Vol. I, p. 24. [邦訳(一) p. 133], p. 421. [邦訳(三) p. 56]。この点に関しては大河内一男『スミスとリスト』(弘文堂, 1954) pp. 209-213をも参看。

(13) いるという点である。いうまでもなく、「生産的労働論」は「資本蓄積論」の中で論じられ、そこでは、「生産的労働」・「不生産的労働」・「勤勉」・「怠惰」は次のように位置づけられる。「生産的労働」とは要するに、労働の年々の生産物のうち、資本として回収される部分と交換される労働である。資本として回収される部分の割合は、節儉 (parsimony) すなわち貯蓄によって増加し、増加した資本はいっそう多くの「生産的労働」者を雇傭することになる。つまり、「生産的労働」と等置される「勤勉」とは、生産的労働→生産物→収入→貯蓄(節儉)→資本→生産的労働という(有効需要の分析を欠くという意味で不完全な)再生産方式に組み込まれ、資本蓄積を可能にする労働の特質を表現したものである。それに対し、「不生産的労働」とは、収入と交換される労働に外ならない。つまり、「不生産的労働」と等置される「怠惰」とは、生産的労働→生産物→収入→費消→不生産的労働という経済過程の中で、その流れをぶつ切りと断ち切ってしまう、資本蓄積に資するところがない労働の特質を表現したものである。(14)

このように見てくると、ここで「勤勉」といい「怠惰」といっても、徳性そのものを表わすのではないことは明白である。(15) 労働が資本主義的(「商業的社会」の)再生産過程に組み込まれているか、その順調な流れを阻止する方向に働くかによって、「勤勉」とされ「怠惰」とされるのである。それはおそらく、前者を構成する〔中小〕資本家、独立生産者、その下に雇われる労働者のエートス、後者を構成する貴族・大地主・大商人とその下に雇われる奉公人とのエートスを表現するものであろう。(16) そうであるとすれば、「商業的社会」の背後に、スミス自身が、その道德論において主張する倫理的宗教的導線が貫いていたことを、ここにおいても確認しているということになるであろう。(17)

「勤勉」と「怠惰」との対比に関して、次に組上にのぼすべきは、いわゆる「重商主義」の理論家たちである。ファーニス (Edgar S. Furniss) によれば、「重商主義」には「多くの一貫しない観念と混淆しながら、その堅い芯として、労働者の国民的重要性の主張を含む一連の教説」(17) (傍点引用者)がある。低い生産力、技術水準の下においては、労働が生産の主要ファクターであり、その(18)

注(13) W. N. Vol. I, pp. 318-320. [邦訳(-) pp. 347-350]

(14) 以上の叙述に関しては W. N., Book II, Chapter III 全体を参照せよ。『国富論研究 I』pp. 67-76 における大河内一男氏の解説、小林昇『経済学史研究序説』(未来社, 1957) pp. 60-73, 同氏前掲論文 pp. 52-3 をも参看。

(15) 例えば、「資本と収入との割合は、どこにおいても、勤勉と怠惰との割合を決定しているように思われる」[W. N. Vol. I, pp. 319-20, 邦訳(-) p. 350] というような表現参照。

(16) 小林昇前掲論文 p. 52 参照。

(17) 本来なら、以上の点と関連してスミスの「高賃金の経済論」を取り上げるべきであるが、すでに大河内(『スミスとリスト』第三章)、小林(前掲書、前編 I) 両氏による周到な研究があるので参照されたい。尚後述参照。

(17) Edgar S. Furniss, *The Position of the Laborer in a System of Nationalism, A study in the Labor Theories of the Later English Mercantilists*. [Reprints of Economic Classics; A. M. Kelley, New York, 1965] p. 8.

(18) 例えば D. C. Coleman, "Labour in the English Economy of the Seventeenth Century." [in E. M. Carus-Wilson (ed.), *Essays in Economic History* Vol. II, London: Edward Arnold, 1962] pp. 299-300, 306 参照。

限りにおいては、生産の向上は労働人口の量的増大⁽¹⁹⁾か、労働力の質的向上による他はなかったわけであるから、「人民の労働と勤勉」(the labour and industry of the people)のみが国富(貿易差額)の源泉であるという主張は一般的であったのである。⁽²⁰⁾

ここでは労働力の質的向上が問題になる。それは労働意欲をもった勤労者を如何にして生み出すかという問題である。これに関し、「重商主義」者の間に、明確に二つの立場がある。その論点を、次にウィリアム・テンプル(Sir William Temple 1628-1699)とデフォーを事例にあげて検討してみよう。

テンプルによれば、「人間は安逸と懶惰とを好むのが自然」であるから、生活費が安く、ということとは賃金が相対的に高い場合には働こうとはしないものである。従って、国家が商業上頭角をあらわそうとするなら、人民を高物価・低賃金の状態に閉じ込め、しかも「怠惰」であることを禁ずべきである。⁽²¹⁾このテンプルを典型とする「低賃金の経済」(economy of low wages)論は、「重商主義の理論体系の基底部に置かれ⁽²²⁾ていたが、それを支えていたのはファーニスによれば厳格なナショナリズム⁽²³⁾である。しかし、そればかりではなく、労働者の側が「伝統主義」(M. Weber)のエートス⁽²⁴⁾によって支配されている現実が反映しているとみななければならないと考える。

しかし、「安逸と懶惰とを好む」のが人間的自然だとすべての「重商主義」者が考えていたのではない。貧しさではなく、豊かさとも「勤勉」は結びつき得たのである。デフォーは次のように論ずる。トレード(trade)を持たない国家の「国土は荒れはて、人民は悲しく打ち沈み、貧しく陰鬱で、重苦しく懶惰である。……富者は富裕で高慢であるが故に無精であるが、貧しい者は、貧しく失望しているが故に無精なのである。貧窮が無精を生み、無精が貧困を生むというのは常に真実であろうからである。われわれはある国民について、その国民が怠慢だというのが、それはむしろ、か

注(19) T. E. Gregory, "The Economics of Employment in England, 1660-1713," [in *Economica*, Vol. I, no. 1, January 1921] pp. 37-42.

(20) Furniss, op. cit., pp. 16-17. 参照。

(21) Ibid., pp. 124-5.

(22) 小林昇前掲書 p. 160, Furniss, op. cit., Chapter VII; Coleman, op. cit., pp. 292, 303; Gregory, op. cit., pp. 42f.; Eli F. Heckscher, *Mercantilism* (Authorized Translation by M. Shapiro, London: George Allen and Unwin LTD., 1934) p. 165. しかし A. W. Coats によれば、1750年を境にして、「高賃金の経済」論が普及し始める。A. W. Coats, "Changing Attitudes to Labour in the Mid-Eighteenth Century", (*Eco. H. R.*, 2nd ser. Vol. XI, 1958) この点は、本稿の直接の論点ではないので、触れるにとどめる。

(23) Furniss, op. cit., passim. Furniss は Mercantilism を何よりも "a vast body of theory and policy dealing with the domestic economy of the nation" (p. 3) であるとし、さらに "the rigid policies of nationalism" (p. 125) というような表現を用いている。しかし、問題は Nationalism の内容であり、したがって小林昇氏がイギリスの固有の重商主義の体制的特質として挙げている、連帯保護制度、旧植民地主義との関わりを論ずる方がより適切であろう(前掲書 pp. 147, 160)。尚、同氏「重商主義—イギリス初期ブルジョア国家の経済政策体系—」[大塚久雄他編『西洋経済史講座』II, 岩波書店, 1960]をも参照。

(24) M. Weber, *Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie*, I, SS. 43-48. [梶山力・大塚久雄訳『プロテスタントイデオロギイの倫理と資本主義の精神』岩波文庫版(上) pp. 63-71]; Coleman, op. cit., pp. 303-4 参照。

れらは貧しいだけだというべきである。貧困はあらゆる怠惰の源泉なのである。⁽²⁵⁾これに対して、トレイドの盛んな国では、「労働がどんなに激しく辛くとも、かれらは喜々としてそれに携わり、かれらのなかには活気と精力とが溢れている。かれらの顔付には屈託がなく、他の人々が遊んでいる時よりも、労働しているかれらの方が楽しそうである。……かくしてここでは、労働が利得を生み、利得が労働への力を生む。／かれらは激しく働けばそれだけ、他の国民よりも仕事に対するより多くの報酬を受け、それがまたかれらの労働意欲をかきたてることになる。⁽²⁶⁾

これは、まさにテンブルの描く世界とは対照的な、高報酬が労働意欲（「勤勉」）⁽²⁷⁾を引き出す「高賃金の経済」（economy of high wages）⁽²⁸⁾の世界である。しかし、その労働意欲が、高賃金に結びつく限りにおけるそれであっては、労働力の質的向上には結びつきはしない。ヴェーバーの表現を用いるならば、「あたかも労働が絶対的な自己目的——『職業』すなわち『使命』——であるかのよう⁽²⁹⁾に励むという心理」が必要なのである。「こうした心理は、決して、人間に生まれつきのものではない。また高賃金や低賃金から直接作り出すことのできるものでもなくて、むしろ長年月の教育の結果としてのみ生じうるものなのである。」⁽²⁹⁾だからこそ、デフォーは *The Complete English Tradesman* のごとき教育の書を著す必要があったのである。

それでは、デフォーに、高賃金が「勤勉」に結びつく、と主張させた理由は何か。それは、そうした反応を示す類型の人間が既に存在していたという事実でなければなるまい。そのような反応を示す人間が多数を占めるようになることが望ましいとされたのは、かれらによって構成される社会の深化・拡大が私的な生活を豊かにするとともに、国富を増大させるという確信があったからに外ならない。そして、私的利益は、トレイドの隆盛→「諸商品の循環」（Circulation of the goods）の活潑化→社会的分業の深化を基盤とする統一的な国内市場の形成という過程を通じて国民的利益に連なるものと考えられている。⁽³⁰⁾

一方、トレイド (trade) の担い手が、独立生産者を中核とし国内商人を含む社会層を指すとす⁽³¹⁾るなら、上述の過程は次のようにいい換えることができよう。かれらの経済活動によって支えられている社会、すなわち Commonwealth の深化拡大が、つまりは国富の増大が、かれらの「勤勉」に

注(25) D. Defoe, *A Plan of the English Commerce* [The Novels and Selected Writings of Daniel Defoe. XIV. Oxford: Basil Blackwell, 1928] pp. 24-25.

(26) Ibid., pp. 26-27.

(27) 例えば、「若きトレイドマンに前途の繁栄を約束するものとして、かれ自身の勤勉に優るものはない」というような表現をみよ。D. Defoe, *The Complete English Tradesman* [Reprints of Economic Classics; A. M. Kelley, New York 1969] pp. 45-46. デフォーの職業倫理一般については山下幸夫『近代イギリスの経済思想』（岩波書店、1968）第3章、天川潤次郎『デフォー研究、資本主義経済思想の源流』（未来社、1966）第8章参照。

(28) 山下幸夫、前掲書第四章、同氏稿『「高賃金の経済」論—その歴史的な性格について』[高橋幸八郎他編『市民社会の経済構造』（有斐閣、1972）所収]、天川潤次郎、前掲書 pp. 123-128.

(29) M. Weber, a. a. O., SS. 44-5. [邦訳（上）] pp. 66-7]

(30) 山下幸夫、前掲書 pp. 1~11.

(31) 山下幸夫、前掲書 pp. 2~3, 49.

よって達成されていく過程である、と。この Commonwealth は、フランクリンによって、commonalty とか nation とか呼ばれ、その精神的・物質的繁栄が public good, common good, national wealth と称されていたものである。⁽³²⁾ この用語法は、後述との関連で留意しておかなければならない。

ここでピューリタンの「勤勉」論を考察すべき段階に立ち至ったのであるが、非国教徒と「厳格、峻厳な〔道徳〕体系」との親和的關係については、すでにスミスの指摘に触れるところがあった。これは17世紀においても、例えばウィリアム・ペティ (Sir William Petty 1623-87) のような慧眼の士の認識するところであった。

ペティは、オランダが信仰の自由を認めている理由の一部として次の諸点を挙げる。「この種の非国教徒 (Dissenters) は、大部分が思慮深く、まじめで、辛棒づよい人間であって、労働と勤勉こそ神に対する自分たちの義務だと信じているほどであること。⁽³³⁾」「これらの人民は神の正義を信じ、そしてもっとも放縦な人々が、世界中でもっとも享樂し、しかもその最善のものを享樂しているのを見て、われわれはこういう淫樂にふける徒、すなわち極端な富と権力とをもち、それがこの世のなかでの自分たちのわけまえだと思っている徒とあえて宗教や職業をとともにするようなことは断じてすまいと思っていること。」⁽³⁴⁾そして次のように述べる。「産業というものは(ある人たちが考えているように)庶民的政府のもとでもっともよく繁栄するものではなくて、むしろどのような国、どのような政府のもとにおいても、そのなかの異端分子、すなわち公認されているところとは異なった信仰を告白するような一部の人たちによって、もっとも活潑に運営されるのであって、このことは注目すべきであらう。⁽³⁵⁾」

ここでも、「勤勉」と「怠惰」との対抗、「勤勉」と国の繁栄との結合、そして「勤勉」と非国教徒との關係への認識を明確に読み取ることができるであらう。まさに、シュラッター (Richard B.

注(32) フランクリンについての叙述は省略せざるを得ないが、“An Advice to a Young Tradesman” (*The Papers of Benjamin Franklin*, New Haven: Yale University Press, 1961, Vol. III, pp. 306-308) や “The Way to Wealth” (*The Papers of Benjamin Franklin*, 1963, Vol. VII, pp. 340-350) などに示された職業倫理は周知のところである。ここでは(1)「もし君がそれを望むなら、富への道は、市場への道同様明白である。それは主として勤勉と節儉 (Industry and Frugality) の二語に依存している。」[“An Advice to a Young Tradesman”. p. 308] という見解、(2)「高賃金の経済」論 [久保芳和『フランクリン研究』(関書院, 1957) pp. 114-120]、(3) 独立生産者の精神的物質的な繁栄が同時に社会の繁栄に結びつくという見解 (そういう社会としての Commonwealth の出現を背景をすることはいうまでもない) [大塚久雄「近代化の歴史的起点—いわゆる民富の形成について—」(『大塚久雄著作集』第6巻 pp. 25-43) がフランクリンにあることを指摘しておく。尚大塚久雄「マックス・ウェーバーにおける資本主義の『精神』」[『著作集』第8巻所収]第三章をも参照。

(33) W. Petty, *Political Arithmetick* [*The Economic Writings of Sir William Petty*, edited by C. H. Hull, Cambridge: Cambridge University Press, 1889, Vol. I.] p. 262. [大内兵衛, 松川七郎訳『政治算術』岩波文庫, pp. 54-5]

(34) Ibid., p. 262. [邦訳 p. 55]

(35) Ibid., p. 263. [邦訳 p. 56-7]

Schlatter) もいうように、「商業活動 (commercialism) とピューリタニズム (その思想は非国教徒のサークルにおいてもっとも強力であったが、英国教会の内部にもその信奉者がまったくいなかったわけではない) との関係は、当時の人々の目には自明のこと⁽³⁶⁾であった」のである。

その「関係」が多面的であることはいうまでもないし、基本的にはヴェーバーの周知の研究が見事に照らし出しているようなものであるだろう。しかし、本稿の課題は、「勤勉」と「怠惰」との対比とが、ピューリタニズムにとって持っていた意味を問うことにある。

本稿の冒頭で、「勤勉」と「怠惰」との対比の問題が、16世紀後半から論じ始められていると述べた。その始源を詳らかにするのは困難であるが、少なくとも、16世紀末の代表的ピューリタン、ウィリアム・パーキンズ (William Perkins, 1558-1602) には、それが明瞭に読みとれる。「職業における労働 (labour in a calling) は金銀の如くに貴重である」とし、怠惰 (idleness) や無精 (slothfulness) はそれ自体が呪われるべき罪であると共に、他の諸々の罪の根源であるという。「怠惰な身体と怠惰な頭脳は悪魔の仕事場である。海は動いていなければ、必ず腐敗するように、身体も掻き立てられ動かされていなければ病気に罹る。怠惰で無精な人間は腐敗した海である。かれらがもっとも怠惰であるときに、サタンはもっとも怠惰でないのだ。サタンはかれを多様な罪へと引きずり込むのに忙殺されるのである。」従って、無頼漢や乞食や浮浪人はいかなる国家 (Common wealth) にとっても無秩序の原因になる。というのも、かれらが市民社会 (civil society or corporation) にも、特定の教会 (particular Church) にも属していないから⁽³⁷⁾である。

ここには、後述のごときピューリタンの労働観の特徴が出揃っている。しかも、パーキンズが当時のピューリタン牧師に多大の影響力をもった人物であってみれば、ピューリタニズムには当初から、「勤勉」な「職業における労働」への深い関心があったといわねばならない。

さて、この16世紀後半から17世紀の全般にわたる、ピューリタンによる「勤勉」の勧めは、単にパーキンズやバニヤン (John Bunyan 1628-88)、バクスター (Richard Baxter 1615-91)、それに後に詳述するステール (Richard Steele or Steel, 1629-92) などの個々の牧師によってなされたというだけではない。むしろ、ピューリタンの体系からアングリカンの体系への挑戦であったのである。それは、17世紀半における『遊技の書』⁽³⁸⁾ ("Book of Sports") と安息日厳守 (Sabbatarianism) をめぐる両者の論戦に、はっきりと見てとることができる。

『遊技の書』の初めの部分には次のようにある。

注(36) Richard B. Schlatter, *The Social Ideas of Religious Leaders, 1660-1688*. (New York: Octagon Books, 1971, originally published in 1940) p. 187.

(37) 拙稿「ウィリアム・パーキンズにおける Riches と Calling —エリザベス朝ピューリタニズムに関する一研究」(同志社大学英文学会『主流』第34号) 参照。

(38) Samuel R. Gardiner(ed.), *The Constitutional Documents of the Puritan Revolution 1625-1660* (London: Oxford University Press, 1889) pp. 99-103.

「陛下には」臣民が、日曜日、夕拝の後になっても合法的 (lawful) な気晴らしを禁じられているのを知られた。祭日 (Holy-days) の場合も事情は同じであった。そこで陛下には、慎重にも、こうお考えになった。この時間が臣民からとりあげられてしまつては、一週間精を出して働いている下層の人々は、その活力を取り戻すための気晴らしの機会を失うことになる。……そこで王者の知恵をもって、その時を正当な遊技^{スポーツ}に利用できるよう、陛下の愛する臣民に向つて宣言を發せられた。⁽³⁹⁾

この宣言が非難の対象としたのは、主としてピューリタン (“Puritans and precise people”⁽⁴⁰⁾) である。かれらの安息日厳守の主張に、この宣言の矛先は向けられている。『遊技の書』は何故にこれを問題にしたのであろうか。第1に、聖日に神への務めを果たした後に、合法的遊技に興ずることは聖俗両法に亵触しない。第2に、「一週間精を出して働いている下層の人々」 (the meaner sort who labour hard all the week) あるいは「一般ならびに下層の人々」 (the common and meaner sort of people)⁽⁴¹⁾ は、他に体を鍛え、気晴らしをする機会がないということ。第3に、聖日の遊技を許さないような宗教には、カトリック的慣習に慣れ親しんだ人々は寄り付かないであろうとの懸念。そして第4に、「一般ならびに下層の人々」が体を鍛える機会をもたず (従つて頑健な兵士を得られない)、気晴らしをする機会をもたず (したがつて不満分子が増える)、宗教に慰めを見出しえない (したがつて非国教徒が増える) ことによつて、国家の基盤が危くされること。

ここに直接表現されているのは、絶対主義国家のイデオロギー的基盤の存続を図ろうとする意図であり、その基盤たりえない宗教的主張を抑圧しようとする意図である。「急速に実質を失いつつあつた社会的結合と連帯」⁽⁴²⁾ との回復を目指す意図に出たものということも可能である。しかし、われわれの観点からするならば、ここで留意すべきは、労働や信仰における緊張が、常に気晴らしによつて緩和されるような生活構造を人間的と見做す、そうした人間観の上に立っていることである。「古い愉しいイギリス」の伝統の上に立つ伝統主義的人間観に連なるともいえるだろう。

一方、ピューリタンの安息日厳守の主張には二つの局面がある。⁽⁴³⁾ 日曜日を厳密に神の日として守るべしという主張の半面として、週日は厳密に職業労働 (labour in a calling) に従事すべしと主張されていたのである。具体的には幾多の聖人祝祭日の廃止の主張である。この二面を統一していたのは、1週間を単位とする律動的な労働の組織化の要請であつたらう。この背後には、二種の労働階級の存在を見なければならぬ。⁽⁴⁴⁾

注(39) Ibid., p. 99.

(40) Ibid., pp. 100, 101.

(41) Ibid., pp. 100-101.

(42) C. Hill, *Society and Puritanism in Pre-Revolutionary England*. (London: Mercury Books, 1964) p. 192.

(43) Ibid. Chapter 5 の全体を参照。

(44) Ibid., pp. 147-8.

一方には、聖人祝祭日の廃止が、労働強化に連なるばかりで、報酬の上昇には関わっていない社会階層があった。週賦役を負う農民や家事奉公人の場合、それは明白である。しかし、それだけではなく、経済的・時間的余裕を人間的自然に必ず付き纏う欲望の発散に浪費してしまうような類型の人間の存在が問題である。かれらにとっては、一定の収入が維持されるのであれば、労働が禁止される休日は、多いほど望ましかったであろう。教会の庭でのオルギーは、かれらの生活に活気を添え、それは安息日にも連れ込む。不規則な気晴しによって遮られ賦活されながら、伝統的な日常生活がえんえんと続く。

それに対して、祝日が廃止されることによって、収入が増加しうる農民・独立生産者・日傭労働者がいた。聖人祝祭日を廃止し、収入を増加させることをかれらが望んだのは、収入の絶対的不足にもよったであろう。しかし、そうした消極的理由ばかりではなく、一層の収入増加を望んでいた、否余儀なくされていたという事情もあった筈である。かれらは、聖人祝祭日の廃止を主張するばかりではなく、一步誤れば「主の日にも働くことを惜しまない人間」にもなりかねない状況の下におかれていた⁽⁴⁵⁾のである。

しかしながら、この安息日をめぐる二つの主張の相違は、その階級的基盤から自動的に流出したものでは勿論ない。むしろ宗教的理由に発するものであることは、1645年1月4日の議会法令(Ordinance)の安息日に関する規定をみても明瞭である。

「主の日」(The Lords Day)は、公的にも私的にも聖別されなければならない。「そのためには、その日一日を聖なる休息(a holy cessation or resting)とし、あらゆる不必要な労働に携わらないこと、あらゆる遊技や娯楽を避けるというだけではなく、あらゆる現世的な言葉、思いを避けることが要求される。」そして、何よりも礼拝に出席すべきである。「主の日」のそれ以外の時間は「読書・冥想(とくに、家族を集め、かれらが聞いてきた説教の説明のために)説教の反復、それに関する教理問答、敬虔な集い、議会法令が祝福されるようにとの祈り、詩篇の歌唱、病人の訪問、貧民の救恤、その他安息日を心楽しいものにするような敬虔で、慈善的で、情の深い義務」に費すべきである⁽⁴⁶⁾。

ここに述べられているのは、「主の日」を聖別すべしという宗教的要求以外の何ものでもない。しかし、「主の日」だけが聖別されればよいという主張ではない。「主の日の聖別について」というこの項の冒頭に、「通常の職業(Callings)の世俗的な仕事のすべての場合にそうでなければならないように、主の日も前々から心に留めておかなければならない」とあるのは、「通常の職業の世俗的な仕事」は、当然週日におこなわれるのであるから、「主の日」も週日も全く同じ心掛けで過されるべ

注(45) Ibid., pp. 151-2.

(46) C. H. Firth and R. S. Rait, *Acts and Ordinances of the Interregnum, 1642-1660*. (London: His Majesty's Stationery Office, 1911), Vol. I, p. 599.

きことを要求するものである。⁽⁴⁷⁾ 週日もまた、「主の日」とは別の意味で、聖別されねばならない。

以上、述べてきたように、アングリカニズムおよびピューリタニズムからの宗教的要請が一方にあり、貴族・地主とその小作農民・家事奉公人の利害および近代的な直接生産者の利害からの経済的・政治的要請が他方にあった。各々の宗教的要請と各々の社会的要請とは、一方から他方が流出するのではなく、相対的自律性を有つのであるから、完全に一致するということはない。だが、この時代にあつては、各々の社会層は各々の宗教的要請によって、その社会的要請の方向を明確にし、強化し、相対抗する社会的勢力を形成していったのである。一方をアングリカンの体系とよび、他方をピューリタンの体系と呼ぶことも、あながち不適切ではないであらう。

各々の体系は勿論、初めから体系づけられたものとしてあるのではない。それは、様々の異質なものを含みながらも、社会的動態の中で、一定の方向を強く押し出し、やがて社会性を帯びてきたひとつの傾向であり、集団である。そうした意味でのピューリタンの傾向のなかで社会性を有し、その後のイギリス社会の発展を特徴づけることになるのは、すでに述べてきたように、「職業労働における勤勉」の勧めに他ならないと考える。

この点に関し、これまでもっとも注目を浴びてきたのはバクスターの著作であつたが、それ以外にも、ピューリタンの宗教的実践指針は少なくなつたのである。たとえば、リチャード・スティールはバクスターとほとんど同時代の非国教徒牧師であるが、かれは『農夫の天職、キリスト者農夫の卓越性、誘惑、恩恵、義務などを示す』*The Husbandmans Calling. Shewing the Excellencies, Temptations, Graces, Duties, etc. of the Christian Husbandman.*, 1668とか、『商工業者の天職、一般召命の本質、必要、選択について論じ、商工業者の特殊召命における正当な経営を指導する』*The Tradesman's Calling. Being a Discourse concerning the Nature, Necessity, Choice, etc. of a Calling in General: and Direction for the right Managing of the Tradesman's Calling in Particular.*, 1684 を出版している。筆者の手にしたものに限っても、その他に、ジョン・コリンズ (John Collinges, 1623-1690) の『織布工手帳、霊に導かれたる織布』*The Weavers Pocketbook: or, Weaving Spiritualized.*, 1675、ベンジャミン・フォーセット (Benjamin Fawcett 1715-80) の『敬虔なる織布工、織布業に関する敬虔なる冥想』*The Religious Weaver: or, Pious Meditations on the Trade of Weaving.*, 1773, 2 ed. がある。これらの著者も非国教徒牧師であり、その著作は宗教的勧告の書である。しかし、他方でデフォの *The Complete English Tradesman* などと共に職業指導書であり、従つて商工業者、なかでも織布工や農夫をはっきりと対象とするものであつたのである。⁽⁴⁸⁾ 本稿においては、スティールの二書を中心に据えて考察を進めたい。

注(47) Ibid., pp. 599-600.

(48) R. H. Tawney, *Religion and the Rise of Capitalism* (Harmondsworth: Penguin, Books Ltd., 1969) pp. 319-320, n. 103 [出口勇蔵, 越智武臣訳『宗教と資本主義の興隆』岩波文庫(下) p. 280].

ピューリタンの宗教的実践指針において「勤勉」が問題にされる場合に留意すべきは、第1に、それが独立自営の生産者及びそれと結びつく商人への勧告であったこと、逆にかれらがそれに共感を示していたということであり、第2に、ピューリタンの教義体系の中では、「職業召命観」との関わりにおいて、それが問題となるということである。

独立生産者にとって「勤勉」こそが成功の鍵と考えられていたことは、すでに指摘されていると(49)おりである。勿論、「勤勉」は独立生産者にのみ要求される徳目ではないであろう。例えば、著名な数学者であり、アングリカンの神学者でもあったアイザック・バロウ (Isaac Barrow 1630-77) は、ジェントルマンと学者とを対象として、『勤勉に関する五論』*Of Industry in Five Discourses.*, 1693なる書物を著している。しかし、ここで注意を促しておきたいのは、それを歓迎したのは、むしろトレイズマンであったという事実である。(50)

ピューリタンの場合には、勧告の対象は明瞭に独立生産者であり、それと結びつく商人であった。(51)つまり、織匠であり農夫であり、トレイズマンであった。今、スティールについて見よう。かれはトレイドを例示して30の職種を挙げている。そこに示される職業は、聖書に説かれている職種に限られているから、当時の職業の状態を直接反映するものとはいえないが、圧倒的多数が手工業であることに注目しておいてよいだろう。(52)さらにトーニー (R. H. Tawney) は、スティールに関して次のように述べている。「ピューリタニズムの英雄時代が過ぎ去ろうとする、宗教的熱狂がもはや一個の美德ではなくなった時代のシティーの精神的欲求を理解し、「独立自営の小店主を実業の世界を代表する人間」と見做して『商工業者の天職』(53)を書いたのだと。そして、そのスティールがかれらに推奨する徳目は、第1に「慎慮」(prudence)であり、次いで「勤勉」なのである。(54)

「勤勉」を奨励し、「怠惰」を危険視する考え方はスティールに限らない。「勤勉と節儉とが欠けていたために、トレイドで成功できなかった多くの人々がいることは疑いない」(55)、「怠惰であることは、かれら(織匠)の精神にはやっかいなものであり、かれらのトレイドの計画を毀つものだと

注(49) 例えば山下幸夫、前掲書 pp. 141-2 参照。

(50) Schlatter, op. cit., p. 190.

(51) ピューリタニズムを支える社会層については C. Hill, *The Century of Revolution 1603-1714* (London: Sphere Books Ltd., 1961) p. 80; do., *Society and Puritanism*, Ch. 4, 5. など参照。

(52) Richard Steele, *The Tradesman's Calling Being a Discourse concerning the Nature, Necessity, Choice, etc. of a Calling in Generall: and Direction for the right Managing of the Tradesman's Calling in Particular.* London, 1672 ed. (Bodleian Library 所蔵本) p. 205. pp. 4-5, 51 をも参照。

(53) R. H. Tawney, op. cit., pp. 242-3.

(54) Richard Steele, *The Tradesman's Calling* の章構成を参照。CHAP. V. Of the due Managing of a Trade or Calling. Six Requisites thereunto. Sect. 1. The First Requisite in a Trade is Prudence or Discretion. Sect. 2. The second Requisite in a Trade is Diligence. さらに Richard Steele, *The Husbandman's Calling: Shewing the Excellencies, Temptation, Graces, Duties, etc. of the Christian Husbandman.* London, 1668. (British Library 所蔵本) p. 241 をも参照。

(55) *The Religious Weaver*, p. 111.

見られていたので、かれらの労苦は習慣となっていた」とフォーセットはいう。バロウは「あらゆる徳が大いなる勤勉を要求する。それ故に、勤勉自体が重要な徳ということになるのは必然である。それはすべての徳の母であり、養育者であり、後見人である。それはまさに、あらゆる徳の素材であり、構成要素なのである」と「勤勉」の基本的な重要性を説く。

それでは、そもそも「勤勉」とは何であろうか。スティールの定義によればこうである。「勤勉とは、天職において、技能・時間・配慮・力を適切に用いることであり、一方で余所事に忙しいという意味も含めての怠惰・不注意と、他方で過度の心労・奴隸的な力行と中間にある。」(傍点引用者)⁽⁵⁸⁾つまり、己れの天職に心身を傾倒し、時間の大部分を費し、好機を逸することなく、仔細な事にも注意深くあることであり、天職以外のことに熱中しないことである。「君の持場があるのだ。君は確信をもって、そこに神が臨在したまうこと、祝福のあることを期待してよいのである。」酒場やコーヒー・ハウスへの出入り、不必要な訪問、娯楽や気晴しは勿論のこと、時宜を得ない猥褻も「勤勉」の徳に反する。「失われた時間を取り戻すことはできない。祈りも涙も金銭も、それを取り戻すことはできない、とトレイズマンは肝に銘じている。」⁽⁶¹⁾「銀の浪費と同じく、時の浪費がある。酒飲みは、酒場で貨幣を費すことによって損をする以上に、そこで時間を費すことによって損をしているのである。」酒場や狐場⁽⁶³⁾に出入りするのには、「時と金とを浪費するという二重の損失である。」⁽⁶⁴⁾

かくして、ピューリタンにとって、「勤勉」とは「天職における勤勉」でなければならないことは明白である。その時「勤勉」は、人間の義務であり、人間を誘惑から守る安全装置であり、人間に富と地位と慰安とを与える手段なのである。⁽⁶⁵⁾そこで、どうしても、ここで「職業召命論」を問題にしなければならない。

スティールの青年への勧告から始めよう。「君自身の幸福を、現世にあっても来世にあっても、大切に扱おうというのなら、天職に就きなさい。無精な精神を奮い立たせなさい。……春秋に富む日々を遊技やくだらないうことで無為に過してはいけない。怠惰は甘美なものである。しかし、怠惰というパンには味わいというものが欠けている。時を無為に過せば、その間に好機は失われてしまう。君を豊かにし、君に精彩を添えたであろう職業^{プロフェッション}に、他の人々が君に先んじて就くことになるだ

注(56) Ibid., p. 114.

(57) Isaac Barrow, *Of Industry, in Five Discourss*, London, 1693. (British Library 所蔵本) p. 39.

(58) *The Trades=man's Calling*, p. 77.

(59) Ibid., pp. 77-83.

(60) Ibid., p. 83.

(61) Ibid., pp. 84-5.

(62) Ibid, p. 80.

(63) John. Collinges, *The Weavers Pocketbook: or Weaving Spiritualized*. London, 1675. (British Library 所蔵本) p. 123.

(64) Benjamin Fawcett, *The Religious Weaver: or, Pious Meditation on the Trade of Weaving*. London, 1773. 2 ed. (British Library 所蔵本) p. 115.

(65) R. Steele, *The Trades=man's Calling*, pp. 87-89.

らう。君が参加している競争においては、わずかでも遅れをとった者が失地を回復することは、まず不可能だろう。万事、その処を得なければ落ち着かないものだが、天職に就いていない者は処を得ては(66)いないのである。」特定の職業に持続的に就くこと、「自分自身の葡萄園」「自分自身の仕事⁽⁶⁷⁾」を確保することが要求されるのであって、その場その場で気紛れに善行を積んだとしても、無意味である。軌道を外れた星のように、かれを待つのは暗闇ばかりである。⁽⁶⁸⁾「君には天職があるのか、神は、今君がおくっている怠惰な生活に君を召されたのか。天職を通して為されたことでなければ、どんな人間的な説明が加えられようと、それは認められない。」⁽⁶⁹⁾

スティールはここで、感覚や感情を満足させることではなく、各人の「持場」⁽⁷⁰⁾、「葡萄園」⁽⁷¹⁾、「軌道」、つまり「仕事」を持つことを強く奨励するのだが、それはいうまでもなく神の召命に基づく天職でなければならない。スティールが天職という場合、当時のプロテスタントに一般的であった「職業召命論」に依っている。召命 (calling) とは、第1に信仰への召命 (General Calling, Spiritual Calling) であり、第2に、特定の職業への召命 (Particular Calling, Personal Calling, Temporal Calling) である。本質的には信仰への召命が職業への召命に優先するが、後者を抜きにした前者は意味を持たないのであって、そこにプロテスタントが天職に執着する理由があった。そこでスティールは天職をこう定義する。「自分自身と他の人々のための、神の指命による、ある特定の仕事⁽⁷²⁾への持続的な就業⁽⁷³⁾」である。

天職は根本的には神の栄光のためにある、ということ的前提にするならば、「自分自身と他の人々のため」 (for our own and others good) ⁽⁷⁴⁾ということが問題になるだろう。自分自身の経済生活を職業によって支えることは当然であって、その限りにおいては問題にはならない。それでは「快適で豊かな蓄え」 (a comfortable and plentiful Provision) ⁽⁷⁵⁾を求めて職業に専心することはどうか。これは常に貪欲、つまり「満たし得ない富への欲望」 (an unsatiable desire of Riches) ⁽⁷⁶⁾への危険を伴う。「貪欲故に便利なものを使い惜しみ、家族に対して必要なものを出し惜しみ、貧者を忘れ、金儲けのために貴重な魂を蔑ろにし、影を捕えて本体を失う。……人間の心は満足を求めるものだが、財産を積んでも、それは満たされない。君の欲望を制することが必要なのだ。」⁽⁷⁷⁾しかし、「快適で豊か

注(66) Ibid., p. 25.

(67) Ibid., p. 4.

(68) Ibid., p. 23.

(69) Ibid., p. 23.

(70) Schlatter, op. cit., pp. 187-205, Charles H. and Katherine George, *The Protestant Mind of the English Reformation 1570-1640* (Princeton: Princeton University Press, 1961), pp. 126-143.

(71) *The Trades-man's Calling*, p. 2.

(72) 以下の叙述に関しては *ibid.*, pp. 37-40 参照。

(73) Ibid., p. 39.

(74) Ibid., p. 177.

(75) Ibid., p. 177.

な蓄え」を求めることは、「それによって一層君の欲望を満たし野望を満足させるのではなく、君の友人に対してばかりではなく、神の友人である貧民に対しても、一層の善を為す⁽⁷⁶⁾」ならば、許されることなのである。かくして、天職の営みとしての経済活動は、何よりも「他の人々のため」でなければならぬということになってくる。

この「他の人々のため」という表現に関連して参照すべきは次のような叙述であろう。「自然の身体において、賢明なる神は、すべての部分と器官とを適切な場所に置かれ、いくつかの機能をそれに与えられ、それぞれが自分の地位に安楽と満足とを覚えている。同様に国家 (Body Politick) においても、すべての人にその機能を配分され、それぞれの地位に相応しい資質と志向とを授けられ、結局、すべてにとって好ましい状態を生み出される。こうして神の無限の知恵と善意とが輝きわたるのである。」⁽⁷⁷⁾さらに、「私を育てくれた国の有益な成員となり、人^{マン}類の善を増進するため⁽⁷⁸⁾」という表現もある。より一層簡潔にして興味深い表現は、Public, Public Good, Common Good, Common-wealth, Whole, Civil Society⁽⁷⁹⁾である。このような表現に接する時、どうしても、国家 (Body Politick) や国 (country) のため、というだけで済ましておくことのできないものを感じるであろう。

公共(という訳語を仮に用いておく)のためという場合まず、働いて得た報酬をどのように用いるかという視点から論ずることができる。例えば、スティールはこう述べる。「善事をなすこと、つまり聖壇に仕える人々を補助し、貧しい縁者、隣人を援助し、貧しい子供たちを仕事に拘束し、才能豊かな学者を学校に留め置く支援をすること、その他の神に栄光を帰するような業をなすこと。」⁽⁸⁰⁾ここには富の伝統的に望ましいと考えられてきた使途が語られている。しかし、これをもってピューリタンの労働観を伝統的といいきってしまうことはできない。「豊かな財産は、もしそれが正しい目的のためならば望ましいものである。富も名誉も君のために善いものならば、勤^{デュリジエンス}勉は、それを達成するための手段である。……通常のトレードマンは高位高官を期待したりはしないが、かれの^{インダストリ}勤⁽⁸¹⁾勉は、かれに可能なあらゆる高位への道にかれを導くのである。」財産の使用に関するこの私

注(76) Ibid., p. 39. 尚, Steele の富についての見解は, ibid., pp. 88-9, 98, をも参照。

(77) Ibid., p. 12. p. 18 をも参照。

(78) Ibid., p. 39.

(79) Ibid., pp. 4-5, 18, 38, 10-11, 22, 72, 92, 141, 181 など参照。尚, これは *The Husbandmans Calling* にも次のような表現であらわれてくる。「敬虔な農夫は先ず神に仕え、次にかれの時代の人々に仕え、最後にかれ自身に仕えるだろう。先ず自身自身に仕えはしない。そんなことをすれば如何にして common good を増進できようか。かれが耕し、種を播くのは、ただそれによって自分が生きるためではなく、それなしには Commonwealth が存続できないからである。…私的不如意の状態にあっても、農夫は、自分自身が富をなし、公共的欠乏がいきわたっているよりも、public wealth を一層歓迎する。かれは私的な人間であるが、公共的精神をもつべきである。」(pp. 230-231) そればかりではなく、先に掲げたコリンズやフォーセット、それにパロウの著作にも幾度も関説されている。バグスターにおいても、それが「職業召命論」の要になっていることは、松田智雄、神山恵介「資本主義の精神」[松田智雄編『近代社会の形成』所収]によっても明瞭である。

(80) Ibid., p. 238. pp. 236-7.

(81) Steele, *The Trades-man's Calling*, pp. 88-89.

的な（公共的善に制約される限りにおいては）関心は、もはや伝統的などということではできないであろう。

そればかりではない。公共のためという場合、報酬をどう使うかという問題よりもむしろ、結果として高い報酬を得ることになる労働そのものの意味と様態が問題なのである。「敬虔なる農夫は富を愛するが故に忙しいのではなく、怠惰を嫌うが故に忙しいのである。⁽⁸²⁾ 慎慮、勤勉、正義(justice)、真実性(veracity)、満足(contentedness)、敬虔(religiousness)などを、スティールが、トレイダマンの具備すべき徳として掲げるのは、まさにその理由による。それでは、そのような質を備えた労働を要求する公共とは何か。真実性の必要についてスティールが次のように述べている点は注目し得る。「真実性がなければ、市民社会(Civil Society)は崩壊してしまう。人間相互のあらゆる商取引(Transactions and Commerce)は、この基本的な一点に依存しているのであるから。⁽⁸³⁾」

スティールの勧告の背景には、商取引と、おそらくは手工業者・農民の生産活動を基盤とする市民社会とがあることを、ここに確認できるであろう。そうであるとすれば、公共のためという表現は、社会的分業の中に組み込まれている商人、独立生産者が、その「持場」における役割を果たすことを意味するということになる。天職は、客観的にはそのような社会的意味をもつと考えられる。そこに出現する社会は、もはや各人の役割が身分によって固定されているような抑圧と保障の体系としての中世的な有機体的社会ではない。

勿論、これは究極的には宗教的理由に発する社会理論である。しかし、スティールは市民社会を意識し、市民社会においては、慎重で勤勉で正直であることは有利なのだともいうのである。それは既に引用したところからも明らかであろうが、次の表現では、それは一層明白である。「真実性の中には方策が、誠実な方策がある。というのは、誰でも手段を尽して信用を守り、一層信用を増し加えるべきだからである。……そのような〔不正直な〕人々は、係争事件が起って、かれらと取引関係にあった人が皆かれを警戒しているような場合に、正直が最善の方策(Honesty is the best Policy)であり、仲間内で公正な取引をしているとの評判が、明瞭な署名を掲げることができることよりも有利であることを思い知るであろう。⁽⁸⁴⁾」

かくして、この市民社会を媒介にして成立する市場価格は正当であり、そこから生じる利得はもっとも適切な(神の栄光を損うことの少ない)利得ということになる。⁽⁸⁵⁾ 市場はまさに公共性(Public good)が実現される場なのである。ピューリタンがあれほど重視した安息日が「諸君の魂の市場開催日」(a Market-day for your Souls)⁽⁸⁶⁾ などと表現されるのも、スティールが市場というものをどのよう

注(82) *The Husbandmans Calling*, p. 242.

(83) *The Trades-man's Calling*, p. 141. p. 101.

(84) *Ibid.*, pp. 142-3. ここで前述のデフォー、殊にフランクリンの用語法を想起されたい。

(85) *Ibid.*, p. 108.

(86) *Ibid.*, p. 209.

に見ていたかを暗示するであろう。

ここまで押しつめてくれば、ピューリタニズムの労働観が、デフォー、フランクリン、スミスのそれと同じ構造を持つものであることは明らかであろう。勿論、ピューリタンの労働観においては、労働が「職業召命論」を媒介にして宗教に直接結びつき、「財産への道」は「徳性への道」に結果として付随するにすぎないのに対し、デフォー、フランクリン、スミスにおいてはむしろ、私的、公的な「財産への道」を歩むために「徳性への道」が要請されるという相違はある。それにもかかわらず、一定の質(徳性)を備えた労働によって基礎づけられた市民社会を前提とし、そこから得られる利得を公共的善と捉え、それを是認し、そこにこそ国家の礎をおくべきだと考える点において一致するのである。その基におかれた労働に方向を与え、それを社会化する上で決定的な役割を果たしたのはピューリタニズムとその運動であった。ピューリタニズムそのものが、デフォー、フランクリン、スミスへ展開していく内的必然性を持っていたのではなく、そこには質的転換が、あるいはそれを要求する社会的状況の変化があったとみるべきではあろう。しかし、労働観に関しては、ピューリタンの転換した軌道の上をかれらは走ったのである。大きくいえば、そこにイギリス資本主義の質的特徴があったともいえるのではなかろうか。ともあれ、ピューリタニズムの労働観は、それだけの内包と射程とを備えていたのである。

(同志社大学文学部助教授)